

ロンドン便り

長谷部徳子

学術振興会の援助を受けて、2001年2月15日から2年間ロンドン大学のハーフォード博士の元で研究に専念する機会を得た。まだこちらに来て一週間とたっていないが、ニュースレターの発行に間に合うとのことなので、何点か紹介させていただきたい。

こちらの実験室にはハーフォード博士のもとに私も含めて9人のメンバーがいるが、ほぼ全員が学位を持っていることに驚いた。日本の大学のように学位を取る前の学生が重要な戦力として実験室を担っているということがない。ただし9人とはいってもそれぞれ別の場所にオフィスがあるようで、毎日顔を合わせるのは2人だけである。一人は実質的に実験室の運営を執り行っているカーター博士、もう一人はフランスからのポスドクのバーバランド博士である。

バーバランド博士はアパタイトの化学組成とアニーリングについての研究をトラック長を測定することによって行っている。そのトラック長測定のための個人差についての研究が面白い。彼は人工的に短いトラックと長いトラックが混在するアパタイト

試料をつくって、そのトラック長測定を行っている。それをいろいろなひとに測定してもらって個人差を見るとともに、自分自身も月に一回測定してその変化を追いかけしている。彼らはトラック長測定のために多量の粒子をまいてランダムに測定するので、場合によって目につくトラックが変動する。その不確定な要素によってどれだけ得られるトラック長分布が変化するのかを見ている。私も早速同じ試料のトラック長分布を測定してみたが、どうやらトラック長の平均はこれまで得られているデータと大きく変わるものではなかったようだ。詳しくは彼のデータの公表を待ちたいと思う。

実際にトラック長測定をした感想は顕微鏡の構造の違いでこれほど困惑するのかもしれないことである。ここにある顕微鏡は右手にステージ移動のためのコントローラーがあるため、左手でピントを調整すると観察場所・ピントを同時に制御することができる。これは私が金沢で使っていたものとは別なので、なにかと時間がかかってイライラさせられた。しかしこれにもじき慣れるだろう。また測定したトラックを記載する

術がないのも不安をあおる。自分が測定したのはどれでどんなデータが得られたのか、座標でも、写真でも何らかの形で残っていた方が安心できる。また測定のためのキャリブレーションを測定毎に行うのだが、万が一、そのキャリブレーションになにか変なことをしてしまったらと思うとやはり不安である。徹底的にキャリブレーションをして、そのファクターをずっと使う方が不必要な誤差を招かないのではと思うがいかがなものだろうか？

カーター博士は何でもやっているという感じだが、ここ数日はスイスから来た研究者とヒマラヤの試料について議論している。地質的な仕事はこのヒマラヤのプロジェクトくらいで、今後は実験室としては基礎研究に向かうとのこと。ジルコンの放射線損傷についての基礎研究でこちらに来ている私にとってもいいニュースである。

またここでも多くのフィッシュトラック実験室と同じようにU・Th/H年代測定用の装置が購入されている。近い将来、装置を立ち上げるために3ヶ月程度専門のひとが来る予定らしい。現在はさらにこの分野を拡充させるための資金獲得にハーフォード博士は忙しく、うまくいけばU・

Th/H年代測定を専門にするポストクが増える予定である。

こちらではどのような学会に参加しているのかと聞いたところ、メジャーなものとしてはEUGと略される2年毎に行われるヨーロッパの地球科学合同大会 (European Union of Geoscience)、日本からも多く参加する4年毎の国際フィッシュトラック研究会、国際フィッシュトラック研究会を挟んで同じく4年毎に行われるヨーロッパ

フィッシュトラック研究会との答えであった。ICOGには出席しないのかと聞いたところ、彼らの認識はICOGは前回の北京でおわったとのことであったが、本当にそうなのであろうか？次回EUGは2001年の4月にフランスで行われる。講演申し込みはとくにメ切をすぎているが、ヨーロッパで今何が議論されているのか、ぜひ行って聞くべきだとのアドバイスをハーフォード博士からいただいたので、これ幸いと早々のロンドン脱出を計画したいと思う。

少し脱線して、ロンドンでの生活についても触れたいと思う。なにぶんロンドンは大都会で、金沢での田舎暮らしになれている私には、そもそも地下鉄で通勤ということが全く新しい経験であるし、いろいろなものの物価の高さや人々の歩く早さの早いことも驚くべきことであった。だがこれはおそらく東京近辺に住んでいるひとにとっては、ごく当たり前のことであろうかと思う。もう一つ驚いたことは街行く人がとても美しく装っていることである。どうも海外というところのこの国のイメージが強いのか、Tシャツにジーパンで闊歩しているイメージがあるのだが、さすがにここはヨーロッパなのだ実感する次第である。私もなるべくジーパンでうろうろするのは控えようと思うのであるが、悲しいかな、なるべく荷物を減らそうとろくな服を持ってきていないので、結局日本の恥をさらすことになってしまっている。